



日本発世界行きデザイン 実現への鍵

三菱自動車工業株式会社
執行役員 デザイン本部長
仲西 昭徳

現在、三菱自動車の車は日本のみならず世界中で販売されています。

2006年度の世界販売台数は約123万台で、そのうち80%以上が日本以外の国で売られています。一方、2006年の世界全体の四輪車生産台数は約6,920万台ですから、当社が占める割合は大きくはありません。

このような中で三菱自動車が、多くの自動車メーカー、多くの車種がひしめき合う世界市場で存在感を維持するためには、自社のアイデンティティと独自性を備えたグローバルデザインが必要になります。

これを実現する鍵は、多国籍デザイナーチームによる協業、言語の違いによる不自由な意思伝達の克服、異なる文化から生まれる切磋琢磨、そして異なる文化に対する受容性の高い日本という土壌（又は日本人の国民性）ではないかと考えています。

それについて少し詳しく、今年から国内含む世界各国で販売を始めた新型セダン『ギャラン フォルティス』（海外名『ランサー』）のデザインプロセスに沿って考えて行きたいと思います。

この車のデザインは、当社の3ヵ国（日本、アメリカ合衆国、ドイツ）4デザイン拠点の競作からスタートしました。競作の結果、生産車の原型になるデザインはドイツのフランクフルト郊外にあるMRDE（Mitsubishi Motor R&D Europe GmbH）デザインスタジオで生まれました。

MRDEスタジオには日本人を始めフランス人、ドイツ人、イギリス人、スウェーデン人、ボスニア人、スイス人など様々な国籍のデザイナーが働いています。

初期デザインのモデル製作はイタリアの工房で行ないましたので、結果的に非常に多くの国籍のデザイナー・モデラー・CADエンジニアがこの車のデザインに関わったこととなります。

このスタジオでのデザイン開発プロセスをみて、以下の2つの点が国内で日本人だけで行う開発と比較してユニークだったと思っています。

第一に、このスタジオのデザイナーは、仕事に関する意思伝達を大半にとって母国語でない英語で行わなければならないことがあげられます。

このことによって、自然と言葉の量は少なくなり、しかし自分の言いたいことはきちんと伝えなければならないので内容はじっくり練り上げる必要があります。

同時に相手のいうことも注意して聞かないとよく解らなくなりますし、時々聞き漏らしたりしますので想像力で補うことや、質問の回数も多くなります。

このような環境のメリットは、外国語で意思伝達をするために通常より頭を使う必要があるため、脳が活性化する点があげられます。必ずしも流暢に英語がしゃべれなければならないという訳ではなく、うまくなくても一生懸命考えるところが大事なのです。



ギャラン フォルティス

また、スケッチやテープドローという意思伝達手段も、不自由な言葉による補足を余りしたくありませんから、意図を分かり易くするためによりストレートでシンプルに、丁寧になる傾向があります。

第二に、国籍が違えば文化的バックグラウンドが異なることがあげられます。

これによって「良いデザイン」という判断基準も変わりますから、日本人がいいと思う形やコンセプトが外国人に受けない場合がありますし、その逆もあります。

そのギャップを埋めるため何度も話し合っって検討を重ねていくと、国籍を問わない普遍的な形が出来てきます。

更に、バックグラウンドが違うことで、逆にお互いが属している共通の組織（この場合三菱自動車ですが）の伝統や文化に関心が向かうようです。

『ギャラン フォルティス』は三菱自動車伝統の逆スラントノーズを採用していますが、この形を再発見したのはボスニア人デザイナーでした。

以上のように、不自由な言語と異なった価値観で切磋琢磨することで、民族を超えた普遍的な美しさが研ぎ澄まされた、シンプルなデザインとなるのではないかと考えます。

最終ステージでは、愛知県岡崎市にあるデザインスタジオで技術要件、生産要件、世界中のマーケットニーズ

が織り込まれて、生産車デザインを完成させていきました。

このステージでは日本人の文化や考え方、例えば異文化に対する受容性、細部にまでこだわるクラフトマンシップ、工程に対する正確さが生かされることになりました。

特に、形に対しての受容性の高さ、様々な価値の共存を許せる受容性の高さが、国際協業をまとめる上での重要な美点だと思います。

この美点のおかげで、対立しあう外国人デザイナーの主張を共存させて無意識レベルまで昇華しそれらを組み替えて再創造出来るのだと思います。

この結果、単にシンプルだけではなく様々な国の文化的バックグラウンドも随所に織り込まれていますから、奥深く飽きられにくいロングライフデザインが出来る可能性もあります。

このように、当社が近年生み出した車種は多くの場合多国籍デザインチームで開発されています。また、2006年日本自動車殿堂デザインオブザイヤーを始め20以上の賞を受賞した『i (アイ)』も国際協業なくしては生まれなかったと思います。

最後にイタリア人の書いた日本古美術の解説書に印象深い一文がありましたので紹介致します。

「日本人は真珠貝が大海の水を取り込み神秘的なプロセスを経て真珠を作り上げるように様々な他国の文化を取り込み豊かな独自性のある美術を生み出してきた。」という一文です。

日本人は昔からオープンマインドに異種の文化を取り込み、創造し独自の世界に誇れる文化を創って来ました。三菱自動車もこの伝統に学び、「日本発世界行きデザイン」を発信していきたいと考えています。



ギャラン フォルティスの逆スラントノーズ



i (アイ)